漁師と養殖業者って？

「漁師」は大自然を相手に魚や貝などの天然資源を獲っています。「養殖業者」は、筏などで魚介類を育てます。例えば畑と田んぼの作物のように、来年度の種を仕込んで、次のシーズンに収穫します。

アサリ漁師といえば鋤簾（じょれん）や熊手で天然の貝を採取するのに対し、アサリ養殖業者といえば、稚貝から育成し、より身入りが良いものに育てます。身入りが悪いと思えば筏に吊るしておいて、次のシーズンに出荷することも出来ます。

養殖は漁業経営を見据えやすく、経済の安定につながると浅尾さんは考えています。

海が育てる

養殖の中でも、浅尾さんが目指すのはカキやワカメのように餌をやらない無給餌養殖。魚の養殖は餌を与えます。しかし、牡蠣にしろ、ワカメにしろ、アサリにしても、海の力で育つもの。漁業者の仕事は海と相談し育つ環境を整えてやること。環境を整えるとは、養殖業者がどのように育てたいかによって、牡蠣やワカメやアサリを置く場所を考えます。知識と経験の上にしかできない環境作りです。そのためには、海の深さはもちろん潮の流れや波の強さなど、海をよく知っていなければなりません。そして、牡蠣など生きものが、今何をどう求めているのか、タイミングを図るのも養殖業者の仕事です。わからない部分は水産研究所に相談しながら進めます。

アクティビティ

浅尾さん

「日頃、自分が育てた牡蠣やアサリなどをお客さんに買ってもらい、美味しいと喜んでもらうことが私の喜びでもあります。みなさんに美味しいと喜んでもらえれば、また買ってもらえます。その時に本当に良い仕事をしていると実感します。

さらに、現場となる海や養殖場を多くの人に見てほしい、体験してほしいと思って、漁船クルージングやアサリ養殖の体験などを、仲間たちと実施しています。食材が、どこで育ち、どこから来たのか、一度現場を見た人たちは、食べ物に対する『いただきます』の気持ちがより深く変わってくるんです。観光ではなく、体験に来てもらうことで育つ気持ちがとても大切だと思っています。

特に、浜で行うアサリ養殖の体験は、桟橋にも乗らないし、潮が引いた時だけ、浜で作業をします。最初は砂が付いて嫌がって、すぐに手を洗っていた子どもたち。人間の本能なのか、1個2個と獲るうちに、手が汚れるだの何だのって関係なくなっていきます。一度、海に対する苦手意識のストッパーが外れると、まだあるまだあると一生懸命アサリを探します。

今はそんなハードルの低い体験から始めているところです。」

漁観連携（漁業と観光の連携）

鳥羽には夏場、観光客がたくさん訪れます。浅尾さんは、観光客向けに海ホタルや夜光虫の見学ツアーも行っています。ツアーをする桟橋は街灯ひとつないところで、暗さを逆手に取って、微弱に光る海ホタルや夜光虫を見に行きます。牡蠣やワカメなどの養殖業は冬に集中するので、養殖業の空いた夏場の漁閑期に海を使ってツアーをすること、これも浅尾さんの漁業なのです。

シンプルな漁業

「『漁業って大変ですね。』と一般の人によく言われます。大変は大変ですが、人が思うほど大変ではないと思っています。辛い苦しいとばかり言うと、次の世代に魅力がある産業だと思ってもらえないし、未来に繋がっていかないのではないかとも思います。今の時代なりの新しい漁業を展開することで、その解決の仕方が見えてくることがあるのではないかと、試行錯誤を繰り返しています。」

その中で、浅尾さんは、シンプルで簡単な漁業を目指しています。それは、みなさんが思っている以上に海のポテンシャルが素晴らしくて、種を浸けておくだけで育ててくれるからだと言います。

『漁業って楽勝っすね!!』

浅尾さんは、かご漁が好きだと言います。餌を入れて、カゴを沈めて、次の日に揚げると、アナゴやタコやカニが入っています。

しかし、これまでは海の中に沈めたカゴや生きものの様子を見ていることが出来ませんでした。揚げた時は最終結果であって、カゴを沈めてから何時魚が入って来たり、何時出て行くのか、そのタイミングがわからず、知りたいと思っていたそうです。

そこで、鳥羽商船高等専門学校の情報処理科の先生に相談したところ、筏から水中に沈めたカゴにカメラを取り付け、そこから動画を飛ばすことで、スマートフォンでもカゴの中の様子を見られるようになりました。

鳥羽商船の学生の一人が「鳥羽のホテルに泊まっているお客さんが部屋にいながら遠隔操作でカゴの中の魚たちを捕獲できたら面白いことになるんじゃないかなぁ。スマートフォンで動画を見ながらできるなんていいですよね。漁業って楽勝っすね!!」と。それを聞いた時には「そんな漁業はないよ。」と学生たちに言ったものの、海の中の様子をスマートフォンで見ながら捕獲すると言うゲーム感覚は、現代の若者に受け入れてもらえるコツのように感じた、と浅尾さんは振り返ります。

このカゴ漁を、アクティビティとして商品化しようとつけた名前が、あなたの魚をキャッチするという意味で「YOU魚キャッチャー（ユーウオキャッチャー）」。名前を思いついた翌日、浅尾さんは、学生がさぞ喜んでくれるだろうと発表しましたが、全くうけなかったので、「親父ギャグだったかな。」と、その時の様子を笑って話してくれました。

現在は、漁観連携のひとつとして、このカゴ漁の実用化に向け、鳥羽商船の学生とテストを重ねているところです。